雑誌『社会事業』にみる貧困問題

－1921～26 年を中心に－

龍谷大学大学院　荻原　園子（8221）

キーワード：個人貧・社会貧・社会連帯論

１．研 究 目 的

本報告の目的は，雑誌『社会事業』誌上に掲載された 1920 年代の貧困問題を通して，独占資本主義確立期において貧者がどのように表象され，描かれてきたのか．貧困が社会問題化しつつあった当時，社会事業行政官，社会事業・社会政策研究者が貧困問題をどのようなものとして把捉していたのか．社会事業界における貧困観の旋回の一端を，貧困問題の構造，救貧行政とセツルメントをはじめとする民間社会事業，労働運動・社会運動の進展との関連において明らかにし，その歴史的意味を再考することにある．

２．研究の視点および方法

1920 年代における貧困問題は，独占資本主義が確立する下で，第一次大戦後の恐慌や関東大震災，労働争議・小作争議の増大，全国水平社や新婦人協会などにみられる新たな社会運動の進展など，国家が深刻な社会統合の危機に直面するなかで創出されたものといえる．「大正後半期における資本主義危機下の貧困問題の性格は，現在における貧困問題の予告的位置」（吉田 1984）にあり，本期において，貧困問題が特殊な社会的弱者のみが抱える問題ではなく，労働者，国民生活全体の問題であるという認識が広がっていくのである．

本報告では，社会連帯論に依拠した社会貧認識を明示し，社会事業界における貧困観の旋回の一端を示した雑誌『社会事業』を中心に，1921 年から 1926 年，大正後半期における貧困問題を扱った論稿，関連文献および史資料（新聞・雑誌，統計資料等）を対象に歴史分析をおこなう．社会貧概念を分析枠組みとして，当時の雑誌論文において貧困問題がどのように把捉されていたかを検討することができると考える．

３．倫理的配慮

日本社会福祉学会の研究倫理指針に基づき，先行研究と自説を厳密に峻別する．史資料の引用についてはその出典について明示する．

４．研 究 結 果

今回本会は社名を「社会事業協会」と改称し，同時に本誌は「社会事業」と改題し，新容を整へて読者諸君に見ゆることとなった．…（略）…慈善事業と称し，社会事業と称するは，単に名称の相違のみでない．貧弱者を救助するのを以て，富強者の篤志に出る慈善的行為に待つという考は，

個人的の問題である．個人対象の個人貧の時代では，それでもよいのであろうが，今や時勢は変遷して，社会対象の社会貧なるものを見るに至った．この社会貧に対しては，是非とも世人一般に対し，社会連帯責任の観念を喚起せなければならぬのである．（「改称改題の辞」『社会事業』第 5 巻第 1 号，1－2.）

1921 年 4 月，中央慈善協会が発行していた中央雑誌『社会と救済』は名称を『社会事業』と新たに変更し，フランスの社会連帯論の隆盛，社会貧認識の形成を窺わせる上記「改称改題の辞」をその冒頭に掲げた．

社会連帯論に依拠した社会貧認識は，生江孝之の代表作『社会事業綱要』においてより明確に示されている．『社会事業綱要』において，生江は社会事業の主な対象は経済貧であり，それは 3 つの要素―自然貧，個人貧，社会貧―からなっていると主張した．このなかで，個人貧は自働的貧困と他働的貧困の 2 つに区別されて捉えられている．前者が放蕩，遊惰，乱酒，浪費もしくは疾病等の結果によって生み出されるために自己にその責任が帰されるのに対して，後者は身体的・精神的障害によるものであり，家族・親類による扶養や隣保，慈善事業による対応がなされるものと考えられていた．

これに対し社会貧とは，農奴解放以後，（1）法律の結果，（2）産業組織の結果生み出され，「社会的同一境遇に置れたる民衆が，社会的同一原因に依て貧困に陥る」（生江 1923）状態を指していた．生江の社会貧概念には，資本主義社会における階級認識が散見されるが，震災後内務省社会局嘱託となった生江にとって，マルクス主義は脅威であり，社会主義とは一線を画していた．社会貧概念は，イギリス救貧法史の知見や貧困調査，スラム街などの実地観察の体験に基づいて叙述されたものである．しかしながら，こうした社会貧を解決する手段として構想されたのは，社会連帯主義の涵養，社会的立法，社会奉仕の推進であり，国家，公共団体，私設団体等の機関が社会に代わって対応するものとされた．

５．考 察

以上のような社会貧認識の形成は，社会事業界における貧困観の旋回の一端を示すものであり，日本における社会事業成立の指標の一つとして従来捉えられてきたものである．社会連帯論に依拠し，当時の社会事業界において，貧困問題が個人の責任ではなく，社会に帰せられるものであると明快に主張する社会貧認識の形成は，現代日本における福祉国家・福祉政策の原型を形づくった思想的基盤の一つとして位置づけられる．しかし，こうした社会事業界における社会貧認識は，一面で帝国主義と結びつき，国家論を欠いたことから国家責任の所在を曖昧にする構造を有していた．

引用文献

吉田久一（1984）『日本貧困史―生活者的視点による貧しさの系譜とその実態』川島書店．

生江孝之（1923）『社会事業綱要』巌松堂．